如きも、既に鼠竊などいふ事もありしにこそ、ヌスミなどいふ語は、鼠に因りて云ひしなるべけれど心得がたき事なり、

〔倭訓栞前編二十二〕ねずみ　倭名抄に鼠をよめり、寢盜の義成べし、人の寢て後によく出て、物を盜食ふもの也、增韵に虫似獸、法苑珠林に鼠盜竊小獸、夜出晝匿と見えたり、子鼠をこねらといふ、羽州には鼠をばかといふ、白鼠を福といふは、太平廣記に金玉之精といへり、日本後紀に、山城國獻白鼠と見ゆ、今は甚多し、とき色あり、斑あり、黑色なるあり、光仁紀に見ゆ、

〔物類稱呼二動物〕鼠ねずみ　關西にてよめ、又よめが君といふ、上野にて夜のもの、又よめ、又おふく、又むすめなどいふ、東國にもよめとよぶ所多し、遠江國には年始にばかりよめとよぶ、其角が發句に、

明る夜もほのかにうれしよめがきみ

嵯峨住去來が曰、除夜より元朝かけて、鼠の事を嫁が君と云にや、本說しらずとぞ、野坡が云、娶が君は春氣にてねずみの事なり、今按に年の始には、萬の事祝詞を述侍る物にしあれば、寢起と云へる詞を忌憚て、いねつむいねあぐるなど唱ふるたぐひ數多有、鼠も寢のひゞきはべれば、嫁が君とよぶにやあらん、又春氣といふ時は、春三月のことなれば、いかゞ有べきか、尙說有、こゝに略す、

鼠性質
鼠形體

〔本朝食鑑十一〕鼠訓彌須美

釋名、家鼠、此卽人家所常有之物也、雖其種類最多今未詳之、

集解、家家皆有、人人每見、則不可言之、然言其大略、狀似兎而小、青黑色帶白、故俗呼色之黑色相合者、曰鼠色、四齒無牙、口唇向下、能囓剛柔、長鬚露眼、前脚爪四、後脚爪五、尾無毛、而紋如織畫、伏夜出穿屏障、穴牆壁、入倉庫、窺庖厨、掀盃舐缶、升燈吸油、糞衣溺書、若人逐之、匿小器之間、或伏如死者、惟盜與黠是鼠之性也、或有著人及牛馬雞犬而囓者、一著之則不離、戀戀竟來而終無息、既竭其物而去矣、故若